

陪して攝州尼が崎大物浦より乗船せしが、雌風に遭ひて住吉浦に漂着し、これより吉野に分入る(吉野忠信)

源義經に陪して北野天神社に参詣し、土佐坊昌俊が神樂堂の蔭に隠れて義經を狙へるを搦出して義經の前に引据ゑ。其夜昌俊部下を率ゐて義經の堀河の邸を襲撃するや、辨慶を戦して昌俊を捕ふ。かくて義經都を聞き、辨慶等と共に主従十二人修験者の姿となつて安宅開にかかり、富樫左衛門家直の警固厳しき由を聞き、辨慶まづ閉所に至つて家直に搦められしが、家直・義經主従に同情して一行の通過を許可す。是に於て義經主従無事に奥州に下つて藤原秀衡に頼る(義靜胎内坊)

へんせう 僧正遍照。皇子の病氣平癒を祈る。後、官邸内する途中嵯峨野にて松風の難儀を救ひ、恒寂の軍と戦うて之に勝つ(松風村雨東帶笠)

ほうこくこくし 豊國國師。攝州尾上にて諸君の先妻尾上の鐘を破きて失せたる時、國師五大明王・五龍神の祕法を行ひて祈禱す(用明天皇願入鑑)

ぼくあん 澁川卜庵。大阪本町新物店菱屋の主入四郎右衛門に灼灸す(今宮心中)

ぼふげん 川倉法眼。大和吉野山の僧なり。源義經が吉野の奥に逃入りたるを横川覺範等と共に之を討取らんとして、義經の家士佐藤忠信に殺さる(吉野忠信)

ぼふしやうばうのそうじやう 法性坊僧正。延慶寺の座主にして菅丞相の師なり。或夜十六夜の晝來つて變成男子の祈禱を依頼す。尋で菅丞相の晝來つて、雷祈禱の爲に内裏より召さるとも行かぬやう請ふ。法

性坊答ふるに、官中より御召三度に及ばば則ち行くを以てす。菅丞相の晝驚つて柘榴を口に嚙んで吐懸くれば火桶となつて燃ゆ。僧正咒詛して之を消す。かくて雷鳴の爲内裏より召さること三度に及ぶ。法性坊乃ち妻内して雷滅除の祈禱をなす(天神記)

ぼふねんしやうにん 法海上人。新黒谷の高僧なり。津戸三郎勝平等に頼まれて佐藤信備追善供養をなす。勝平が佛法に歸依して自刃するや、法然乃ち佛法の不思議を見せし之を頓覺居士に往生せしむ(津戸三郎)

ぼふみやうしやうにん 法明上人。藤原民部丞孝房の末子なり。母が虎平次に殺さられたる時、其助の疵より生れ出で、中山寺の真如上人の弟子となり、叔父教僧法師に從ひて七墓を巡り、飛田の墓地に來つて兄眞光の齋死を發見し、教僧と協力して之を蘇生せしむ。後、賀古の庄の伽藍に住して亡母亡姉の善提を弔ひ、衆生の利益を祈る(賀古教僧七墓廻)

まきふて 卷筆。布引次郎照房の妻なり。舅勝成が菅彦尊を刺さんとして蹴鞠の會に出でたる跡を慕ひ行き、勝成が首を拾ひて歸る。後、持統天皇の勅を奉じて夏仁親王を尋ね行き、山の中に山賊萬九郎に刺殺さる(持統天皇歌軍法)

まごあもん 粉屋孫右衛門。大和國新田町の農夫にして、大阪淡路町飛脚商龜屋忠兵衛の父なり。「むかほは」條を見よ(冥途飛脚)

まごあもん 粉屋孫右衛門。紙屋治兵衛の兄なり。「ちへま」條を見よ(心中天網島)

まさかど 平將門。朱雀院の承平二年十月反逆を企て、鶴島に皇居に擬して邸宅を造り、逆して王と稱し女色に耽り、同じ姿の七人に化現せしが經連盡きて秀郷に刺殺さる(領域懸物編)

まさきよ 鎌田兵衛正清。源義朝の重臣なり。主君に從ひて屋敷に宿ち行き、妻宿木の實家長田司忠宗を便り、酒宴の席にて忠宗に臨討に遭つて殺さる(鎌田兵衛名所説)

まさきよ 加藤虎之助正清。眞柴肥前大領入吉の供小姓を勤む。平朝臣春長の命を奉じて惟任判官光秀の頭を毆打し、久吉に叱られて蒙古征伐軍の留守を命ぜらる。光秀反して春長を本能寺に弑すや、正清逃れ馳に駆付け、敵中に飛入り春長の首を拾ひて、其事變を春長の嫡子の春忠に報告し、敵軍と奮戦して光成の首を刎ぬ。後、久吉朝鮮征伐を思立つや、正清乳守の里に遊女小儀を訪うて其所持せる朝鮮地圖を懇請す。是時小儀の情夫小西彌十郎其地圖を奪はんとし、正清と格闘せしが、小儀の仲儀によつて和解し、相共に朝鮮征伐の軍に従ふ(本朝三國志)

まさくに 梅津源左衛門正國。常盤の父なり。常盤が清盛の妾となつて、怒に觸れて、捕へられて正國の門前にて磔刑に處せられんとする際、俄に産氣付きて清盛の子を生む。正國清盛を怨んで常盤の生める子を殺す(孕常盤)

まさしげ 楠木正成。足利尊氏西國の兵を率ひ海陸より都へ攻上る。正成謀を獻し、暫く天皇吉野に幸し給ひ、敵をして恣に京師に入らしめ、然して後河を獲き糧道を絶ち、敵の疲るるに乗じ四方より攻めて之を破らんこ

とを奏せしが、坊門宰相清忠に妨げられて用ゐられず。是に於て正成死を決し澗川に出陣する途中、櫻井峠にて子の正行を前に招き教訓して故郷に歸し、澗川にて尊氏と決戦して利あらず、退いて民家に入り、弟正季に謂つて曰く、吾子何處にか魂を託せんと欲する。正季曰く、願くは七度人間に生れんと欲するさんと。正成欣然として死す(吉野都女捕)

まさずみ 修理之介正澄。土佐將監光信の門弟なり。元信の畫きたる虎生動せるを正澄畫虎を採殺し、光信より土佐光澄の名を貰ふ(領域反魂香)

まさつら 楠木正行。幼少の時足利尊氏と戦はんとして走出でて母に制止せらるる際、名和長年が後醍醐天皇を守護し來るに遇ひ、相謀りて天神森に陣して朝敵を破り、長年と共に天皇に供奉して吉野の内裏へ急ぐ(吉野都女捕)

まさとし 原五郎昌俊。甲斐國守武田信玄の家士なり。信玄に陪して浪人山本勘介晴幸を草履に訪ふ。後、勝頼の不興を宥め衛門姫との婚儀を懇請して聽かれず。勝頼武功を立て甲越和解するに及んで、昌俊等勝頼を誘引して婚儀を擧ぐ(信州川中島合戦)

まさのぶ 高坂彈正政信。甲斐國守武田信玄の重臣なり。勝頼に陪して信州諏訪明神に参詣す。勝頼途に長尾驍虎の姫御門前に遇ひて相思の仲となり、於て政信・義清相争へる際勝頼の行方を失し、之を尋ね行き路傍の辻堂に宿る。折しも一人の男來つてここに憩ひ、腰にせる瓢を傾け一二杯飲んで眠る。政信其瓢を盗みて飲み盡し、誰何せられて能

く見れば知人の長尾頭虎の家士直江時綱なりければ互に打解く。是時通に兵火を望んで甲越の軍村上義清を攻むるものと思ひ、各殺軍へ駆け行く。甲越の戦長く結んで解けざりしが遂に和解となるや、政信等勝願の供して萬歳を高唱す(信州川中島合戦)

まさもり 右衛門頭平政盛。清原石大將高藤に従ひて佐夜中山に赴き、高藤と共に葦屋に同宿せんとし渡邊綱と喧嘩し、高藤に物部平太の保護を依頼して去る。其夜平太が喜之介、小糸に殺さる。是に於て政盛怒つて喜之介を頼光の旅舎に隠ひ、渡邊綱と戦つて敗る。後に頼光の四天王に訴へられて新罪に處せらる(願山遊)

まさわか 政若。葛木島主の子にして都賀若の兄なり。つがわかを見よ(聖徳太子繪傳記)

ますら 伊賀留田ますら。外道を信じて山彦王子の師範なり。王子が花人親王と外道と佛道との法力を比べて負けるや、ますら聞いて大に怒り、魔術を行ひて己が兩眼空座に飛出で、花人親王の様子を見届けて歸り、百島大夫と檢非違使勝勝とをして喧嘩せしむ。後また其一眼玉世姫の禮母の魂に入替りて悪事をなせしが百島大夫に平けらる。是に於て山彦王子と丹州大江山の城に據り、戸皇子の軍と戦つて滅ぶ(用明天皇職人鑑)

またごらう 太秦又五郎。侍従と云ふ女の父なり。侍従が高脚直の氣に入りたるを喜び、近隣の者を集めて祝宴を開ける際、侍従は既に脚直に斬られて、其死骸を羅籠に乗せて持來る。又五郎怒歎して心亂れ、走つて吉田兼好の庵室に投ず。是時師直の家士小林

民部百騎を率ゐて兼好の庵室を襲撃す。又五郎駕聞して敵を破り小林民部を殺す(兼好法師物見草)

またごらう 又五郎。大阪三軒屋町佃手洗屋の主なり。虚無僧來つて懇請するを容れて抱腹の吉野と吉岡とを交換し、後に其虚無僧こそ官より尋ね人となる憲法なるを知り、捕へて恩賞に預らんものと其跡を追掛く。其夜強盗石川五右衛門に押入られて多くの財物を奪ひ去らる(傾城吉岡染)

またじらう 「なかつれの條を見よ(嵯峨天皇甘露雨) 僧の弟子にして吃なり。家貧しく大津繪を畫きて口を餓す。土佐の名を望み光信に懇請して拒絕せらる。又平失竊して自害せんとし繪像を畫く。然るに其繪石を穿つ。光信感じて光起の名を授く。又平また親香の前を助け、雲谷等と戦ひて之を破る(傾城反魂香)

まつがえ 松枝。豊後國濱の市の遊女を勤めて源次次秀景と馴染み、秀景の貧困を救はんとして有馬の池の坊の湯女となる。或日秀景に浴客の刀を盗まんとし、計らずも其浴客の己が舅なるを知るに至る。是時逆別府別府澄が湯入の客となりて滞在せるを聞き、秀景と協力して澄澄の入浴中を襲撃して適す。これより櫻葉と名を替へて鴛鴦の巫女となり、別府豊足に招かれて無間と答へ、熊と火燭燃上る中に落ちて盲目なるを借せしめ、豊足に遊山を勤めて、秀景と共に謀つて遂に豊足を滅す。朝廷其功を嘉して松枝に猪狩野の名を賜ふ(百合若大臣野守鏡)

まつかぜ 松風。須磨の蓋なり。須磨に詣居せる在原行平と契り、また若官の乳母となり、詔王の魂と入替る。嵯峨野にて恒寂僧部の軍に襲はれしを僧正遍昭に助けらる。かくて後行平が諸官に奪ひ去られたる日の御座の御剣を取戻さんとし、妹の村雨と共に海中を渡るを夢みて寶劍を得て、妹と共に四位に叙され播州の鹽濱を知りす(松風村雨得經)

まつよひ 待宵。備前國兒島郡藤戸の浦の鹽濱藤大夫の女なり。佐々木二郎廣綱に惚められしを佐々木三郎盛綱に救はる。然るに盛綱が藤大夫を殺して海に沈むるや、待宵その母、妹と共に狂女となり、父の死骸を得んとし藤戸の浦の汐を漂ふ。時に廣綱、盛綱の命と偽りて待宵の母を捕へ去る。是に於て待宵、妹と共に男装して蘆濱となり、盛綱を狙ひて矢を放つ。其矢傍の水鉢の石に立つ。母を尋ねて由比濱に下り、盛綱の妻となる(佐々木先願)

まつわかまる 松若丸。吉田少將藤原朝臣行房の妾班女の子にして梅若と存子なり。母に連れられて行房の邸に至り、梅若に逢うて喜ぶしが行房の室に叱らるる際、比良天狗、松若丸を攫み去る。行房の舊臣波路七郎俊兼自刃して其魂天狗となり、松若を得て隅田川畔にて之を班女に渡す。かくて松若は母に連れられて京に上り、吉田家を相續す(發生隅田川)

まのちやうじや 眞野長者。豊後國の富豪にして玉世姫の父なり。上方騒動の由を聞き、玉世姫を連れ歸らんとし上り、歸途播州尾上にて兵藤太が梵鐘を引上ぐる場に来り、花人親王なるを知らずして山路と名付けて連れ歸る(用明天皇職人鑑)

まよぶにん 摩耶夫人。淨飯太子の后にして彌重彌の妹なり。四月八日入胎して悉達太子を生みて前觸せらる(釋迦如來誕生會)

まれば 中納言希世。延喜帝の繪畫を奉じ、三善清實と共に行いて錦衣を逢坂山に棄つ(錦丸)

まん 大阪淡路町龜屋忠兵衛の飯糰女なり(冥途飛脚)

まん 阿萬。鹿兒島薩摩の町苗宿新屋兵衛の女にして、葛原源五兵衛と殷勤を通す。然るに繼母はお萬を他に嫁せしめんとししかば、お萬乃ち源五兵衛と共に走らんとして裏扉を越えしが、帶松枝に懸りて吊下る。お萬その有様を見とお萬を助く。かくて後お萬、源五兵衛を尋ねて相逢へる際、お萬の繼母來つてお萬を連れ歸らんとす。源五兵衛怒つてお萬の繼母を斬り、又誤つてお萬を斬る(薩摩歌)

まんくらう 萬九郎。王妃長歌の兄なり。龍田明神にて春菫呼に描められしが、是時龍立右衛門秋廣の魂佛轉の心に入替つて萬九郎の縛を解く。かくて萬九郎は吉野の里に歸り紙通業に従事せる際、雷雲法師來つて長歌を奪ひ去らんとせしかば、即ち雷籠して雷雲を奪ひ、老母を負ひ夏仁親王を誘うて春日山に赴く。これより親王、長歌を笠置山嶺に隠しめらせ、之を養ひ奉らん爲に山城となり、山中にて巻巻を殺し、其衣類を見て家に歸れば、泥次郎照房我々に泊れるを見て、之をも殺さんとして組敷かる。折しも親王の仰によつて相和して義兵を擧げ、飛鳥の里にて持統天皇の軍に會し、大舉して春菫呼を滅す(持統天皇歌軍法)

六九九

まんげつ 満月。讃州志度浦の漁夫戸次

の女にして蓋なり。大織冠鎌足の臣若狭之介則風の妻となり、鎌足の命を奉じて、龍王に奉はれたる面而不肯の玉を取戻さんとしして懸龍母魚の爲に咬まれて絶命す。鎌足乃ち満月の左の脇腹を切りて、孕めたる子を引出し養子となす、長じて之を房前大臣といふ。(大織冠)

みくまのうじ 三熊野大人。彌山に棲む懸龍にして厄神の首領なり。素戔嗚呼と取ひ敗れて取押へられ、寶劍の所在を詰問せられて、出雲嶽の川上島上の巖に棲み八岐の大蛇の毒を取りたることを白狀し、毒に降服して尊族等と共に靈紙に捺印して姿を消す。(日本振袖拾)

みさきのまへ 和田義盛の娘にして朝比奈義秀の姉なり。花見の宴席にて熊野と花一枝の賽合をなす。宴終りて名劍友切丸を預りて歸る途中、京小二郎の母木蔭より出でて其劍を奪はんとす。是に於て兩人斬結んで互に痛手を負ふ。(本領會致)

みだいらし 彌陀石。鎌田兵衛正清の子なり。七歳の時に両親が長田庄司忠宗に殺さる。みだいらし兄弟若と共に忠宗を恨みて追廻せしが、悪源太義平に連れられて源義朝に逢ふ。(鎌田兵衛名所志)

みだわか 彌陀若。鎌田兵衛正清の子なり。九歳の時に両親が長田庄司忠宗に殺さる。みだわが弟みだいらしと共に忠宗を恨みて追廻せしが、悪源太義平に連れられて源義朝に逢ふ。(鎌田兵衛名所志)

みちさね 菅丞相道真。延喜帝の御宇右大臣となり、才學勝れ仁慈の徳に富む。左

大臣藤原時平、唐使裴文翰、藤原菅根等と謀奏せられて勤勤の身となり筑前太宰府に流さる。その都を出づる際京童二三百手に梅枝を捧げ、門前に來つて別を悲しむ。太宰府に着きて後、博前の白木夫が訪ふの死骸を安樂寺に葬送する際、白木夫の宅を夜うけて荒木に斬付けらる。菅丞相即ち庭上に飛去り、一首の歌を詠じ神變不思議を見せて其妻清ゆ。荒藤太が養兼竹に刺殺さるる際菅公の姿現はれ出づ。菅公遂に歸洛を敢さるる勤勤なきを悲しむ。筑前國天拜山に登りて一通の告文を文杖に挟み、梵天帝釋に留神となつて君邊の慈臣を取殺さんことを祈り、延喜三年二月二十五日五十九歳にて、天拜山上にて生けるが如くして死す。同年六月二十五日留神となり、多くの尊族を葬みて内裏の上に鳴りはためき、時平、菅根等を取殺せしが、法性坊の法力によつて祈伏せられ、正一位太政大臣南無天満大自在天神の御饗を賜はる。(天記)

みちのくのつばね 陸奥局。官中第一の美女なりしが、吳服中將雪枝と情を通じ罪を得て里住ひせし、所に雪枝訪ひ來る。尋で雪枝の愛人瀧淵姫も雪枝を尋ねて來る。陸奥之を拒絶して怨み瀧淵の魂と入替る。是時宇治太郎が雪枝を殺さんとして來歸す。陸奥乃ち雪枝を連れて遁れし、其寄手の一人を刺殺せし後、富田山の與九郎狐に誘引せられて靈親王の御前に出でて有難き御説を賜はる。(天鼓)

みつてる 藤原光輝。藤原成實の弟なり。桓武天皇の御代遣唐使となつて渡唐し、周易の研究を遂げ、其註釋書などを携へて歸朝す。朝廷其功を嘉して中納言左大將に任ず。或日釣竿を携へて出で、小川の邊にて以

呂波の前に逢うて情を通じ、以呂波の前を横懸懸せる鹿鹿に見られて罵詈雑言を吐く。後、鹿鹿が母を弑するや、光輝は鹿鹿と戦つて斬門前に至り、下僧等に捕められんとせしを空海に助けける。光輝これより空海の弟子となつて高野山に登る。高野山腹の神谷宿にて以呂波の前が己を尋ね來るに邂逅し、其名を語らずして哀れを極む。後、都に上り守敏に招かれて畜生門の刑に遭はんとせしを空海に以呂波の前は朝廷に召されて官談を賜はる。(以呂波物語)

みつなり 左馬五郎光成。惟任判官光秀の子なり。父と共に反して主君城之介春忠を愛宕山花見遊山の場に見ひ、春忠をして自刃せしめしが、この戦に光成も眞柴肥前大領久吉の家士加藤虎之助正清に殺さる。(本朝三國志)

みつはる 藤内四郎光治。藤内木郎家治の弟にして該の藝人なり。足利將軍義教に従ひて叛臣赤沼入道父子を吉野城に攻めて軍功あり(雪女五枚羽子板)

みつひて 惟任判官光秀。平朝臣春長の臣なり。春長より眞柴久吉の部下となつて蒙古征討の軍に従ふべき命を受けて、之を悦ばず。春長に怒り近習の者に命じて光秀を毆打せしむ。是に於て光秀反し、春長を本能寺に暗殺して之を弑し、春長の室を圍み、室の彈琴の音に士卒の心蕩然となれる折しも久吉の軍に攻破せらる。光秀水坂の懸橋の中を落りて落ち行き、小栗畑の里にて宿を借らんとして春長父子の幽霊に悩まされ、夜中山崎を

越えて本國に落ちんとせしが、土民の爲に竹槍に貫かれて死し、其死骸を日の岡に逆傑にせらる。(本朝三國志)

みやぎの 宮城野。京都九條の遊女なり。藤原内膳丞孝房と關係す。後に神崎の遊女となり、孝房の父教孝の配流せらるる状を見て、其罪を贖はん爲に眞光を贖して金を得んとす。然るに眞光これが爲に失踪するに至りしかば、宮城野は遊郎を脱走し孝房と共に眞光の行方を探ねて飛田の墓所を彷彿す(賀吉教信七墓廻)

みりんわう 「おぼくまのしん」を見よ(浦島年代記)

みんぶ 小林民部。高武藏守師直の家士なり。主命により關谷判官高貞の奥方を捕へんとし、手兵を率ゐて吉田兼好の庵室を圍んで敗れ、太婆又五郎の鐵にかかりて殺さる(兼好法師物見草)

みんぶさゑもん 醒井民部左衛門。夜廻の物頭なり。大阪三軒屋町御手洗屋に強盗石川五右衛門が圍入せしを取押へんとし、身仕度して飛入つて五右衛門に斬殺さる(傾城吉岡笑)

むぐらまる 花室三位禪丸。在厩行平の室司の前の兄にして桓寂僧都一行的の悪人なり。勅使と偽りて龜彦の庄司に平と關係ある者を皆殺すべきを命す。尋で庄司の家に亂入して浦島太郎に投殺さる(鰻風村雨束帶盛)

むさう 鎌須無藏。師島手下の強盗とな

り、志賀幸崎大明神にて戸無瀬の局を搦めて
掠奪せんとし、一物も獲られざるを怒つて
戸無瀬を刺さんとし、過つて師高を刺し、京之
進親次齋藤瀧口頭方に殺さる。(城歌加留多)

むねきよ 彌平兵衛宗清。平家の侍な
り。伏見の里に住す。或夜常盤三幼児を伴う
て來り軒下に雪を浚げるを見、早く去るべき
を罵刺し、雀を浚拂ふと稱して空弓を鳴らして
去らしむ。源氏の臣藤九郎盛長來つて常盤
を奪はり去らしめたるを謝す。宗清また班替
の雀來れりと稱して、然も暗に戦兵を擧ぐべ
きを圖す。宗清これより官職を辭して閑日月
を送りしが、牛若に變装せる東雲の急を救う
て牛若の跡を追はしめ、牛若の追手監物太郎
を道に要して其追ひ行くを妨ぐ(源氏烏帽
子折)

藤九郎盛長の妹を襲り、松が枝といふ女を設
けしが、妻子を離別して平重盛の家士とな
る。重盛の命を受けて常盤の行旅を視察せん
として、行旅の警武士に變装し、煩悩にて常
盤の闇中に入る。常盤は宗清と心付かすして
抱付きしかば、宗清乃ち常盤を罵詈しながら
も同情を寄せ、常盤、横笛、雛鶴の三人をして
闇に清盛の邸を脱走せしむ(平家女護身)

むねしげ 五大院右衛門宗重。北條
高時の權臣なり。安藤左衛門入道聖秀が成長
親王を禮遇したるを罵りしが、高時の仲裁に
て聖秀の娘婿合姫と宗重の嫡子宗房と婚約を
なす。然るにこの婚約も聖秀によつて破ら
る。元弘三年五月二十二日新田義貞の軍に鎌
倉を攻められて戦利あらずと見るや、乃ち高
時の首を刎てて義貞の軍門に降を請ひ、猛犬
白石に嚙附がれて死す(相模入道千疋大)

(序云、綱吉將軍に生類を憐むべきを勸め
たる護持院隆光を驅てかくいひなしたる
にて、猛犬白石も新井白石にあてたるなり)

むねしげ 富隆左衛門宗重。源頼朝
より浪人吟味の役を命ぜられ、鶴岡の官し、源
六郎清治を捕へ、足立右馬允景入に欺かれて
之を赦す。かくて京上り島原遊樂に遊び、遊
女唐琴のかかて戀慕せる琵琶姫なるを見て其
奇遇を喜び、直に請出さんとす。唐琴之を悦
ばず。宗重怒つて唐琴を毆打し、更科の情夫
七草四郎萬壽に讒飛ばされて歸り、部下を率
ゐて四郎を襲ひたれども之を過し、四郎の據
れる筑紫の七草城を攻めて討死す(傾城島原
壯合殿)

人名部

むねふさ 五大院十郎宗房。五大院右
衛門宗重の長男なり。里見義助を搦めて獄舎
に投ず。或日給合姫願舎を劫うて義助に食物
を贈る。宗房怒つて給合姫を誘ひ、其食物を
地に棄て、附付けて之を義助に食はしむ。また
義助が大倉が谷に引出して、猛犬をして嚙殺
さしめんとして、義助に投飛はされて死す
(相模入道千疋大)

むねもり 平宗盛。源氏の兵に捕へら
れ、元暦元年五月下旬頼朝の前に引出され、
宗盛死罪を免れんがして平大納言時忠に罪を
歸し、哀訴する所ありしが遂に首を刎らる
(彦胎内犯)

むねをか 兵藤太宗岡。佐渡國松浦の
人なり。山彦王子の花入親王討滅の旨を奉
じて歸りしが、之が爲に母死することとな
り、法師となつて播州高砂尾上の松樹下に佛

道を修行し、海底の梵鐘を引上げんとして往
來の者に勸進を求めし折しも、花入親王・佐
用姫・諸君に邂逅す。かくて後醍醐皇子の東
上を明石にて出迎ふ(用明天皇職人鑑)

むねをか 伴大納言宗岡。惟喬親王を
比叡山嶽の小村に訪ひ、美人を描ける願
を出して暗に惟喬親王に謀反を勸む。是より
惟喬親王と心を合せ、暴逆の行多かりしが、遂
に殺若五郎仲則に殺さる(井筒業平河内通)

むまやどのわろじ 麻戸王子。父は
用明天皇、母は玉世姫なり。生れながらに
て佛徳を具し給ふ。山彦王子を丹州に攻めて
之を滅す(用明天皇職人鑑)

人名部

むめかは 梅川。大阪新町遊樂屋の抱
妓なり。大阪淡路町飛脚商龜屋忠兵衛と馴染
む。忠兵衛藏屋敷の侍の委託金三百兩を横領
して梅川を奢り。梅川一時喜びしが其請出
金が委託金なりしを知るに至つて、深く歎き
ながら忠兵衛に連れられて大和國新口村に赴
き、忠兵衛の故舊三郎の家に立寄る。折しも
忠兵衛の父孫右衛門鎌田村の寺院に参詣する
途中、下駄轆を切つて泥田に墜り込みたるを
見、走り行きて懸に辱はる。孫右衛門その様
子を熟視して梅川をを察し、銀子一枚を與
へて忠兵衛と共に細所待遣に連れしむ。かく
て兩人其途上捕吏に取押へらる(冥途飛脚)

むらさめ 村雨。須磨の浦の蟹にして松
風の妹なり。在原行平と契りて姉と戀を争
ひ、互に行平が熊背に奪はれたる日の御座る
寶剣を取返さんとし、海中を渡るを夢みて
寶剣を得たり。これによつて行平の罪赦され
て京に還ることとなり、松風・村雨も四位に叙
し、播州一國の鹽運を知行するに至る(松風
村雨東帯鑑)

むらたう 官太村任。大納言民部卿藤原
元方の舊臣にして土師別當村正の弟なり。歳
て元方の次女二位姫を戀慕せるに、二位姫が
桃園染五郎豊母と契りて稀若を生むや、村任
大に怒り、二位姫の姉薄雲及び兄村正と相謀
りて稀若を川中に投じ、二位姫を捕へんとし
て眞砂乙太郎勝興に妨げられて古葛羅に押込
めらる。また豊母を殺さんとし、其行方を尋
ね、醍醐の旅籠屋にて勝海・勝興に殺さる
(日本西王母)

むらはや 村速。夜盗なり。藤原入道等
と共に鏡の宿にて常盤及び其乳母千種を殺し
て財物を奪ふ。後、鏡の宿の名主の宅を襲ひ
て牛若丸に斬殺さる(十二段)

むらまさ 土師別當村正。大納言民部
卿藤原元方の舊臣なり。元方の長女薄雲及び
官太村任と心を合せて二位姫を育し、二位姫
の侍女小萩に暴行をなし、其抱ける二位姫の
子稀若を奪ひ、眞砂前司勝母を毆打して絶息
せしむ。後に小萩が官城野と名乗りて軍津の
遊女となれるに戀慕し、之を請出さんとして
桃園染五郎豊母に斬殺さる(日本西王母)

めうかん 龜屋妙閑。大阪淡路町飛脚商
龜屋忠兵衛の義母なり。『めうかん』を取見よ
(冥途飛脚)

人名部

めうけい 妙慶。奈良の遊郎吉田屋の主
人仁三郎の母なり。遊女吾妻が客の藤を殺さ
んとして夜中目覚せるを、其心を知らずし
て來つて話掛く(淀離出世福徳)

めうしやくぜん 妙釋禪尼。藤原
藤原藤原光顯の母なり。後世を顧み水宮谷
に閑居して念佛に餘念なし。或日熊鷹來つて

に閑居して念佛に餘念なし。或日熊鷹來つて

に閑居して念佛に餘念なし。或日熊鷹來つて

に閑居して念佛に餘念なし。或日熊鷹來つて

に閑居して念佛に餘念なし。或日熊鷹來つて

人名部

光輝を護す。福尼其言を信ぜず、却つて光輝を庇護せしかば、熊鷹の邪穢の刃にかかつて死す(以呂波物語)

もうじゆん 妙順。藤原左衛門の母なり。伊左衛門の馴染める屋屋の名妓夕霧の病氣革ると聞き、金二千兩を贈りて之を調出し、且見舞に行く(夕霧阿波物語)

もうほふばう 那智妙法坊。修験者なり。日野中納言實朝の愛人菊姫及び實朝の子阿新九が佐渡郡司山城入道三郎の館を忍出で、髪を越えんとするに際會し、之を助けて我家に伴ひ隠まひしが、妻歸つて様子を見て、遊女若衆を引入れしものと邪推して痴情喧嘩せる時、山城入道の兵來つて菊姫等の行方を捜索す。妻乃ち夫の悪性を辱しめんとして菊姫等の隠所を指示す。妙法坊力戦して敵を退け、菊姫・阿新九を連れ船に乗つて遁れ、山城入道の追及するを歌謡押搦んで祈禱すれば、大風浪に起つて山城入道の船を覆す。かくて妙法坊は二人を連れて京に上り、左衛門尉藤原に逢ひ、相談りて石見守中原を奈良新能の堀に驅ひて殺す(本朝用文章)

もとくに 藤太基國。伴大納言宗原の家来なり。主命により清和天皇の中宮高子(春)を奉はんとし、犬の皮を被りて高子の邸内に侵入する所を般若五郎仲則に見付けられて殺さる(井筒薬平河内通)

もとやす 丹左衛門尉基康。平家の家士なり。妹尾太郎無頼と共に平清盛の命を奉じ、鬼界島に赴きて成経・康頼・千島の三人を船に乗せて歸る途中、備後國敦賀浦にて俊寛の下人有王九に遇ふ。折しも此浦に清盛の船泊す。乃ち千島を有王九に預け、清盛の船に

行き成経・康頼を連れ歸れることを報ず(平家女護島)

もへゑ 茂兵衛。大經師以春の手代なり。以春の妻おさんに頼まれて銀を調達せんとし主人の印利を盗みしを、相手代の助右衛門に見付けられて殺打せらる。この夜茂兵衛かねて己に懸想せるたまの思を晴させんとし、竊にたまの園に入り、計らずもおさんと不義に陥り、相共に逐電して丹波國柏原に落ち行き、新六と變名して助作に便る。助作これに官に訴へし爲、捕吏に縛せられて刑場に行き、黒谷の東岸和向に救はる(大經師普賢)

もしまたいふ 百島太夫。玉世姫の傳なり。伊賀留田のますらの魔術にかかりて檢非違使勝船と喧嘩し、山彦王子が花人親王を捕へ去らんとするを奪還す。後に豊後國に歸り、山彦王子の道士伊駒宿禰を捕縛し、麻戸王子の軍に屬して山彦王子を丹州大江山に攻めて之を滅す(用明天皇職人鑑)

もつら 常陸大掾百連。吉田少將藤原朝臣行房の室の兄なり。山王權現二十一社修造の奉行を勤め、行房の丹誠して集めたる木材を離じ、遂に吉田家を兵衛景遠と共に奸策を廻し、行房の臣勲解由兵衛景遠と共にりしが、北白川にて酒宴の席上上行房の妾班女に銃殺せらる(雙生隅田川)

もりさだ 判官代盛貞。夫を思つて冤罪に陥れる以呂波の前を刑場に引かしめ、其首を刎ねんとして後に廻れる際、俄に河村金吾惡戯に抜討にせらる(以呂波物語)

もりしげ 平次兵衛盛重。按察左大將

早考の家来なり。壬生の里に籠居せる藤壺女御の番を勤め、清淵の高聲に話を聞かめて樹に吊上り、其後羽倉伊賀久國を遣きて藤壺女御及び其乳母治部卿を殺害せしめ、また花山天皇を弑し奉らんとして白川の邸に押寄せしを又五郎長に追縛はる。かくて後男山八幡宮に隠れたる弘敷殿を襲ひ、取敢て小倉親新左衛門尉景春に殺さる(弘敷殿)

もりづ 越中次郎兵衛盛次。内大臣平重盛の家士にて、左京之邊義次の兄なり。義次が建禮門院の侍女刈藤と密通したる悪評を聞き義次を誹問す。盛次當番の日察藤左衛門尉勝頼と乱れ合ひしが、重盛公より建禮門院の侍女横笛の檢死を命ぜられて建禮門院の細所に至る。然るに建禮門院は加賀郡司師高よりこの事を聞かされて憤殺せらる。盛次乃ち師高の謀より事起れるものと察し、勝頼と和睦して師高の行動に注意す。かくて建禮門院より横笛の首桶を出されしを聞き見れば、笛を折り土を盛りてあり。義次の首桶を開けば、義次の髪に石を入れてありしかば、深く建禮門院と重盛公との仁心深きに感泣す。かくて後重盛公の命によりて頸方、義次義達の使者となり、志気辛騎大明神の邊にて義次等に遇ひ相共に都に上る(縁歌加留多)

もりつな 佐々木三郎盛綱。備前見島

の戦に先陣をなさんとし、藤戸の浦の鹽機藤太夫に藤戸の海の淺瀬を教はりしが、之を秘密にせん爲に藤太夫を殺して海に沈む。盛綱は先陣の功によつて備前の領主となり、藤太夫の死を憐みて之を供養し、其妻子を養ひ、遂に藤太夫の女侍帯を妻となす(佐々木)

もりなが 比企藤九郎盛長。源氏の臣

なり。義朝の墓に詣でて遊谷金王丸と邂逅し、互に罵り合ひたる後和して相共に長田庄司と朱雀野に戦つて常盤母子を救ふ。また伏見の里にて常盤が彌平兵衛宗清の同情にあづかりたるを感謝し、伊豆姫小島にて下つて源朝と仲居居せしが、義經を破つて官還する由を聞いて之を迎に上る(源氏烏帽子折)

もりなが 大森彦七盛長。足利氏臣にして勾當内侍に懸謝し。和田源秀女裝して瀧籠に乗り來れるを内侍と思ひ、其手を取りて源秀に追拂はる。また新田義興が西の宮に敗れて退くを追撃し、小山田高家(高)の首を討ちて義貞の首と思ひ、尊氏に見せて恩賞にあづからんとす。かくて後勾當内侍が三種神器を捧持して吉野に至るを道に要して奪はんとせし時、忽ち神器奇符を顯はして盛長を追拂ふ(吉野都女御)

もりはる 藤内二郎盛治。藤内太郎家治の弟なり。三郎武治が叛臣赤沼幸滿に従はんとするを意見を。盛治治家貧なり。本阿彌右衛門太郎清祐の刀を得んとし、清祐の女玉椿を啖して屋内に入り、賊名を貰ひしが妻の身賣金三十兩を出して漸く免るを得たり。かくて後義將が琵琶島と贈するを聞き、義將が敵の術中に陥らんとするを憂ひ、尋ね行きて同會を求めれば我妻の小囀なるに驚く。是時赤沼の軍來り懸ぶ。盛治夫妻奮戦して之を退け、琵琶島に伴ひて走る。かくて斯波義

將に従つて赤沼父子を吉野の城に攻めて滅す
(聖女五枚羽子板)

もりひろ 平井大炊介森廣。近衛家の
家人にして一角の兄なり。故主君經忠の後家
より繼子月光公を殺すやら頼まれて之を謀め
しめ、弟に心を疑はれて格闘して負け、日像
に露されて兄弟和離し、日像の弟子となり智
覺と法名す。かくて鹽谷左京時平が日像の寺
院を觀覽したる際之と奮戦す(大覺大僧正御
傳記)

もりみつ 狛左京進盛光。南都の樂人
なり。祿大納言頭の中將勅使として春日社に
詣で、盛光を取立てて關東に下さんとして連
れる。かくて盛光京都滞在中比丘尼靜三を
北越殿の庭室に尋ね行き、ここに計らずも娘
の春姫と邂逅せしが、折しも近藤兵庫守廣忠
に襲撃せられ、奮戦して園を破り丹波路に落
つ。後に奈良にて廣忠が靜三等を縛せる場
に出遇ひ、直に靜三を助けて其縛を解き、廣忠
姦通の罪科を守護職に訴ふ。これより盛光再
び用ゐられて正四位に叙せらる(三世相)

もりや 大連物部守屋。崇峻天皇に仕
へ、常に佛法を排斥したり。母より立花は天
の祭と聞いて立花の會を催し、遂に反逆を謀
り、膳親實を斬らんとするや、母乃ち守屋に
意見して自刃す。守屋益怒つて親實を殺し、
東直駒に命じて聖德太子の如芹摘姫を攻めし
め、自ら内裏を圍みて帝及び公卿の北の方を
奪ひ去り、秦川勝司削廣海に命じて公卿の
北の方等を河内國志紀の山館に幽閉せしめ、
尋で斬罪に處せんとせしが、川勝身を翻して
天皇の御味方となりし爲、守屋の勢頓に挫
け、遂に聖德太子の軍に河内國稻村の據城を

攻められて滅ぶ(聖德太子繪傳記)

もりあもん 山本森右衛門。河内屋與
兵衛の伯父にして高橋源之丞士頭を勤む。高
橋源之丞の小性運の出頭小栗八郎に敵対して外
出したる途に、與兵衛會津屋の郎九と喧嘩し
て、郎九に投げたる泥土皿を外れて八郎の馬
に中る。森右衛門無禮を怒つて與兵衛を毆打
し將來を戒めど放免す。後、與兵衛が豐島屋
お吉を殺すや、森右衛門は捕吏と共に與兵衛
の行方を捜索して之を捕縛す(女殺袖地獄)

もりいほ 五位之介諸山。檢非違使勝
船の弟なり。勅命を受けて佐渡の島の流人とな
り、松浦庄司に仕へて京籠と號名せらる。
偶花人親王玉世繼佐渡の島に漂着し給ひし
を助け奉らせ、己が妻を親王の敵生駒の宿禰
の女なるの故を以て離別し、松浦庄司の女佐
用姫を妻となして花人親王に從ひ、播州に
て兵藤玄奈岡が梵鐘勸進の場にて前妻と邂逅
す。かくて後明不局にて藤戸王子を迎へて山
産王子討伐の軍に從ふ(用明天皇親人鑑)

もろうち 平帥氏。朝日將軍に補せら
れ、源頼朝を辱かしめんとして頼朝の家臣に
辱かしめらる。是に於て頼朝を誹して追討の
勅命を受く(大掛物十對)

もろかど 阿門府生諸門。主君國の大
臣の悪事を諫めて怒に觸れ浪人となる。義子
諸宗が綾織姫を預りて虐待するを見、妻と共に
綾織姫に騙して姫を鶴國の館に遁れしめ、
鶴國と諸宗と格闘するを傍觀して諸宗を助け
す。また妻を略して中帯姫を襲を削いて袋子を
出さしむ。雄略天皇其忠節を褒して舊官に復
し給ふ(浦島年代記)

もろたか 加賀郡司帥高。戸無瀬局の

弟なり。雄略門院の侍所を勤め、門院の侍女
横笛及び刈儀を横懸慕す。養和元年九月北山
に茸野の御遊ありし夜、横笛は頼方と、刈儀
はまたくに密通するを捜知し、頼方等と口論
し、次に刀渡を捕へて口説けども、其意に従
はざるを怒り、奸策を廻して刈儀の横笛義次
を殺さんとして、帥高の罪惡顯露し、追放せ
られて岩行源九郎 鎌須無敵と共に強盜とな
り、志賀幸時大將中に姉の戸無瀬局を擄め
て擄奪せんと欲す。帥高等と戦ふこととなり、
拵められて與に押込められたるを源九郎 無
敵に刺殺さる(娘歌加留多)

もろたふ 伊豫國武者所太宰大貳稱
諸任。官女世繼御前を寵慕し、また平國の
實劍を奪みたりしが、平惟茂禁中の變化退治
の武功によつて、余吾將軍に任ぜられて世繼
御前及び平國の實劍を賜はる。是に於て諸任
憤怒し、世繼御前より惟茂への贈物に對して
暴行を加へんとし、金剛兵衛利綱に追拂は
る。かくて塵起行をせしが戸隱山にて房若
に斬殺さる(袍刺劍本地)

もろなほ 高武藏守帥直。足利尊氏の
重臣なり。卿の宮を寵慕せしが、侍従といふ
女より豐平判官高貞の室の美人なるを聞き、
侍従をして高貞の室の清水觀音に詣請するを
途に要し口説かんとす。然るに侍従は高貞の
室が其意に従はざるを察して逃ぐ。帥直怒つ
て侍従を捕へて殺し、高貞を將軍家に讒奏し
て切腹せしめ、家来の小林民部に命じて高貞
の室を捕へしむ(兼好法師御見事)

文和三年冬、各處取り廻るる夜鎌倉飯島屋敷に茶
會を催す。其後豐平判官高貞の遺臣四十七士
に襲撃せられて滅ぶ(壽整太平記)

(序云、吉良義央を帥直、淺野長矩を高貞に

替へてかく作りかへたるなり)

もろひて 平帥秀。平帥氏の子なり。家
臣大木戸八郎國俊、吉見二郎盛時、悪五郎教
定、浦泉九郎行治と六長餘騎を率めて、源頼
朝が北陸に落ち行く處に一對に追撃し、散敗れ
て殺さる(大掛物十幅一景)

もろむね 阿門郡領諸宗。圓大臣の子
なれども諸門の如と替へられて諸門の子とな
る。圓大臣の重臣となりて悪行多し。仙人の
生血を得んとし、葛城山中に入つて大草香の
臣を殺す。また綾織姫を預りて横懸慕し、姫
が己の意に従はざるを怒つて虐待したりし
が、遂に鶴國に刺殺さる(浦島年代記)

もんかく 高雄の文覺。流人となりて
伊東次郎祐近に謀送せられ、津の國渡邊川よ
り乗船し、越州潮見湯にて暴風に遭ひしが、文
覺祈念して風靜まる。伊豆に下りては頼朝、
朝日の前に崇れる八重姫の怨靈を祓除け、翌
朝より頼朝の御體を取出して、頼朝に見て之
を旗上げを勧め、自ら願原の新都に上りて院宣
を請ひ、歸途夜盜に遇ひて之を縛し、頼朝に
院宣を傳ふ(頼朝伊豆日記)

(序云、文覺流人となり、海上にて法力を以
て暴風を静めるまでは、舞之本文覺にあ
るを脚色したるなり)

源頼朝に心を寄せ、頼朝の爲に平家追討の院
宣を下し賜はつて、伊豆に下る途中還州池田
の遊女町を過り、熊野の狐つきといふ難病を
治し、狐より頼朝の御體を貰ふ。赤澤山にて
一萬、稻千王と鬼王、圓三郎と互に斬削はんとす
る場に出付け、四人の供を斬削はんとす
たるを約せしめ、且成人の子後藤頼隆に主従
するべきを誓し、また股野五郎久を捕へ、鬼

王・圃三郎をして之を殺さしむ(本領曾我)
 南都の偵兵に交りて、平家の討手難波・妹尾の軍を悩まし、また平家追討の院宣を申受け、源義朝の體を擧へて頼朝に謁せんとし、伊豆國蛸が小島に下る途中駿州宇都山にて居眠り、源氏が平家を討滅したるを夢む(平家女護身)

やげんじ 天日嗣源次。給師野氏久の曾なり。橘右大臣富房公の馬方となり、伊賀越にて金岡に出遇ひ、相共に逆日王子の殿中に亂入して王子を滅す(天智天皇)

やごらう 刷毛彌五郎。河内屋與兵衛の友なり。野崎觀音聖詣の途中、遊女小菊を連れたる倉津者の郎九と喧嘩す(女殺油地獄)
(刷毛は、刷毛長(俵客などに流行した結髪)をきかせた渾名である)

やさざあもん 本田彌三左衛門。東の高家入間殿の奥家老なり。丹波領主由留木侯の女しらべの姫を迎に來り、姫に陪從して歸る途に、伊勢國開の宮にて馬追三吉綿盜して捕へらるるや、しらべの姫の乳母澁野井の愁歌を察して三吉の罪を赦す(丹波與作)

やしちらう 印南彌七郎。賀古川民部少輔膳原孝房の家士なり。賀古に歸つて孝房熊野浦にて難船に遭ひ溺死したることを報告す。かくて後慈満の熊源太兄弟と闘つて之を搦む(賀古教信七墓詞)

やしふらう 小西彌十郎。堀の養理商小西如清の子なり。放埒なりしかば父より勸當せらる。彌十郎乳守の遊女小嬢と馴染む。或日加藤虎之助正清が小嬢を高島屋に擧げ、小嬢の所持せる朝鮮地圖を懇請せるを聞き、彌十郎その地圖を奪はんとして正清と格闘せ

しが、小嬢の仲裁によりて兩人相和し、正清の推屬によりて眞柴肥前大領久吉の部將となり、正清と共に朝鮮征伐の軍に従ふ(本朝三國志)

やしゆだらによ。耶輸多羅女。阿私大臣の女にして才色秀絶なり。十七歳の時悉達太子に嫁す。或日太子と共に蝴蝶の戯るるを見て櫻姫す。太子出家するや、耶輸多羅女は吉祥女を伴ひて其姫を遣はんとし、門前にて伯了頼の難に遭ひ、恒河橋上にて提婆達多の火攻めに遭ひ、鳥陀裏に救はれて相共に太子を尋ねて檀特山に赴く。釋摩大悟し給ふを見隨喜の涙に咽ふ。摩訶迦葉より授戒を受け、子の羅睺羅と共に剃髮して比丘比丘尼となり、釋尊涅槃の場に至る。釋迦如來誕生吉野

やすきよ 二宮太郎安清。曾我兄弟の姉姪なり。建久四年五月富士府の時鎌倉の留守役を命ぜられ、高橋を作りて見張中、二十八日の深更富士郡野の方に提灯が明願に馳過ふ様を察して見張の使者を出す。折しも鬼王圃三郎が曾我兄弟の形見の品品に文を添へて持ち歸る。安清之の室直に其封を切らんとす。安清之を制して己が心中を語る。是時使者歸つて、曾我三子が其亡父の仇工藤龍經を殺したるを報ず(曾我虎が題)
 源頼朝が富士府に出でたる留守中、源範賴の自刃及び曾我三子が富士野の岩場に紛れ込みし注連の早打を命ぜられ、猿谷四郎重朝野心を抱き、安清の妻は曾我の縁者なれば、安清を使者たらしむべからずと主張して己其使者たらしめんとす。是に於て安清は妻を離別する状を書きて之を白崎八平次に渡しに出發し、藤

澤の驛にて根原景高等に妨害せられしが、禪師坊の盡力によつて事無きを得たり。かくて曾我祐成假屋に亂入して、刃を石にて叩潰したる刀にて格闘す(曾我會稽山)

やすすけ 藤原保輔。平井保昌の弟なり。源頼光に見棄てられて素浪人となり、兎賊將軍太郎良門に一味し、江文の宰相爲成の邸に闖入して、駿馬の鬃を奪はんとして坂田公時に殺さる(原州鞍馬)

やすひら 伊達二郎安衡。陸奥守藤原秀衡の次男なり。兄錦戸太郎國衡等と謀り、鎌倉の命を奉じて義經を討たんとす。然るに弟某三郎忠衡を守つて其意に従はざりしかば、まづ忠衡を擧撃し之をして自刃せしめ、進んで義經を高館に攻破り、義經、辨慶が蝦夷に落ち延びたるを追撃し、戰敗れて死す(源義經將茶經)

やすもり 平安盛。常陸介となり平家の將なり。花山帝に中納言高房の女三の宮を勸め、宸筆の御書を携へて三の宮を迎に赴き、尻橋にて渡邊綱と取ひ、金時に毆打せらる。安盛また右近の前に弘徽殿女御を誘るやう言合めて、之を帝の御伽女に奉る。然るに安盛が右近の前に言合めたることを覺して帝の逆隣に觸れ、渡邊綱に縛せられて源頼光の前に引出さる(傾城酒吞童子)

やそたける 八十臈師。筑紫の首領にして王命に従はす。重臣阿蘇羅連を使者として、景行天皇第二の官神賢臣の御降嫁を奏請して、吉備國彦の妹歌妙を神賢臣と信じて結婚の式を擧げしが、歌妙が己を狙へるに氣付き之を刺して第二の宮に斬付けらる。臈師痛手を堪へず、宮の武勇を歎賞して日本武尊の御

名を奉り、今より我は尊の臣下なりと語つて自刎す(日本武尊吾妻鑑)

やどりぎ 宿木。長田庄司忠宗の女にして鎌田兵衛正清の妻なり。正清主君源義朝に従ひて尾張に下り忠宗を便る。然るに忠宗平家の恩賞に預らんとして子の景宗と謀り、義朝及び正清を騙討せんとす。宿木陣子を隔つて之を聞き深く悲しむ。かくて忠宗が正清を襲する酒宴の席に起て、能と酔狂を正清に見せて、泣きながら暗に夫に注意を促し、酒を飲ましめざらんとすれど正清覺らず、遂に忠宗の術中に陥つて殺さる。宿木狂亂となり。二子に忠宗の惡逆を語つて忠宗に殺さる(鎌田兵衛名所丞)

やはた 八幡三郎。工藤左衛門前經の下人なり。主命により白鹿を獲んとして犬坊丸と共に山に入り、曾我十郎祐成を見付けて之を捕へんとし、祐成に化けたる白鹿に打撃さる。また河津三郎が股野に投付けられたる状を描ける繪の後に隠れて河津を罵罵して朝比奈義秀に投付けらる。後京小二郎の手引に、曾我兄弟を大儀の遊廓に擧はんとし、鬼主兄弟に搦められ曾我兄弟に首を刎めらる(曾我五人兄弟)

やへぎり 八重桐。荻野屋の遊女なり。坂田藏人時行と馴染みて夫婦となる。時行亡夫の仇を報ぜんとして夫婦離別す。或日八重桐、源朝姫の邸前を通りかかると三味線の音に耳を惹き、尋で時行と邂逅し、源朝姫の間に應じて我身の上を語り、時行の薄情を語りて意見す。時行身を恥て自刃し、其屍塊火焔の輝風となつて八重桐の胎内に入る。八重桐之より飛行通力の女となり、清原右大将高